

東北文教大学・東北文教大学短期大学部 図 書 館 報

発行 東北文教大学・東北文教大学短期大学部附属図書館 〒990-2316 山形市片谷地515 ☎023-688-7544

目 次

- 図書館で、ともに、学ぶ…………… 1
- 私のおすすめ本…………… 3
- 平成27年度 図書館報告 …… 4

図書館で、ともに、学ぶ

副学長 須 賀 一 好

「静寂な環境で静かに学び、共同学習できるスペースでワイワイ学び、そしてそこで得たものを学生諸君がさまざまな場所で活用する、そういう学習をサポートできる図書館を目指したい」。これは『東北文教大学・東北文教大学短期大学部 図書館報』の第6号(2015年9月14日発行)に、「静寂とワイワイ反対のように見えるものをつなげる」というタイトルで記された熊谷図書館長の言葉です。軽妙な筆致で近年の大学教育における大学附属図書館の役割の変化がわかりやすく記されています。この熊谷図書館長の言葉にもあるように、私たち東北文教大学の図書館は、これからも大学図書館としての設備や運営の見直しを絶えず行いながら、学生の学びをサポートする役割を果たし続けていくことでしょう。「静寂とワイワイ」という要素の両立もこれからの望ましい図書館のあり方だと思います。

かつて、大学の図書館は、知の在処として、いつまでも変わることなく存在し続けることに価値を見いだしているかのようでした。ところが、その大学図書館にも少しずつ変化が見られるようになりました。いつのまにか、図書を検索するためのカードをぎっしりと詰めた棚が並んでいたスペースや、図書を閲覧するためのスペースに、パソコンが整然と並ぶようになり、多くの学生がそれに対座するようになったのです。そうした構図は、いまや大学図書館の日常的な風景です。大学における不易を代表するかのような大学図書館にも、世の中の電子情報化の動きが例外なく及んで

きたということなのでしょう。それは、さらに急速に、そして図書館のあり方に大きく影響を及ぼす程度にまで進んできています。始めは、図書の管理や検索など、図書館の管理運営や利用の面に限られていたものが、そのうちに学術雑誌を中心に書物の中身にまで進展してきました。本や学術資料をひたすら書庫に貯蔵する方向に向かっていった図書館が、今度はその方向を反転し、ペーパーレス化に向かって進み始めたのです。

しかし、おもしろいことに、大学図書館は、その一方で、別の違った面を示し始めるようにもなりました。本そのものを学生に見せるという動きです。本を展示したり紹介したりすることは、一般の図書館では、以前から行われてきた活動ですが、大学図書館では、あまり行われてきませんでした。そういう発想は弱かったのだと思います。行われていることは、新たに蔵書となった本を知らせる程度でした。専門的な書物や学術資料を蔵書としてなるべく多く持ち、それらを確実に管理し、利用者に提供する。それが大学という場にある大学図書館の役割だったからです。本を陳列して学生にアピールする必要などなかったのです。本を整理しておく書架に「閉架式」が多かったのも、そうした前提の下で蔵書の安全な管理を優先したからでしょう。しかし、そうした一部の人がしか入れない閉ざされた書架では、多くの学生にとっては、さまざまな本と偶然に出会うチャンスはほとんどありません。おそらくは、そうしたことに対する見直しが行われ、そして図書の管理方法の電子情報化が進んだことで、

広く「開架式」の方式が使われるようになったでしょう。そのおかげで、誰もが本や雑誌を直接手にとって見るができるようになり、それが標準的な方式となりました。そして最近、そうした「本を見せる」という発想が実用的なレベルを超えて装飾の域にまで達したような図書館も作られるようになっていきます。重厚な蔵書で埋め尽くされた高い壁面が閲覧室を囲むようにデザインされた図書館や、美術館が絵画を展示して解説するように、さまざまな本を解説付きで展示するスペースを持った図書館などがそれです。どちらの場合も「本を見せる」ことに力を入れる点で共通しています。前者の例では、圧倒的な書物の量を見せることで「知」の存在感を示し、後者の例では、少数の選ばれた本と学生との出会いをさりげなく演出しているのです。

大学教育における「知」への導きをこのような形で効果的に示せるのは、それが実体として存在する本だからです。電子情報として蓄積されたデータでそれを行っても効果は薄いでしょう。そうしたことは、自分自身の経験を振り返ってもよくわかることです。本という存在には「知」に対する素朴な感動を引き起こす力があります。それは、昔の本や珍しい本に限られたことではありません。どこの図書館にも備えられているような大型の辞典、例えば『日本国語大辞典』全13巻を一見するだけで日本語の語彙量を実感することができるでしょうし、『大漢和辞典』を少し覗いてみるだけで人は漢字という文字をどれほど作り使ってきたのか、その事実に驚きを持って接することができるでしょう。大学図書館は、実体として存在する書物の力を再認識し、それを効果的に見せることで、学生たちを「知」の世界へと案内することにも力を入れ始めているのです。「静寂とワイワイ」という二つのスペースを大学図書館に備えていきたいという本学の方策も、こうした大学図書館の教育機能の改善強化という文脈の中にあります。

そこで、あらためて思ったことは、「図書館で、ともに、学ぶ」ということについてです。第一に、なぜ「図書館で」なのかということ。今後、さらに知的情報の電子化が進み、どこからでもアクセス可能になれば、どんな場所からでもオンラインで情報を入手できるようになるでしょう。そうしたら図書館という空間は必要ないのでしょうか。かつて自分の担当する授業科目の一つを図書館で行ったことがありました。日本語の歴史的な文献を資料にして、さまざまに調べたり、考察したりする演習の授業です。その図書館には、数は限られていましたが、貸し切りの小部屋が用意されていたので、その小部屋を利用しての授業を思いつき、少人数の学生を対象にした授業を行いました。学生の発表や話し合いが行われる演習という授業では、その過程で、さらに調べたいことや確認したいことが

出てくるものです。それらを解決するために、みなで手分けして各種の辞書や専門的な図書などを書架から持ってきて、協同して調べたり話し合ったりして、結論を出していくような授業をめざしました。図書館の中だからこそ行えるメリットを活かそうと思って始めた授業でしたが、残念なことに継続することができませんでした。その小部屋は、あくまでも図書館の施設という扱いであるため、使おうとするたびに部屋の空き状況に左右され、計画的に行われるべき授業には適さなかったのです。もし、図書館に、そうした授業用のスペースが十分に確保されていたら、どんなによかったかと今も思います。知的情報や資料は、今後も、さまざまな形態で存在していくでしょう。それらを同時に、同一空間で総合的に活用できる場所が図書館なのだと思います。

第二に、なぜ「ともに」なのかということ。つまり、大学での学びのあり方についてです。いま大学では、学生の主体的な活動を基盤とする授業を展開しています。それは、大学教育についての見直しをきっかけに進められてきた教育改革でしたが、徐々にこうした学びの効果が各大学に実感を持って受け入れられるようになり、現在は、教育課程の中に定着しつつあるように思います。地域社会や実際の専門的なフィールドで、ともかくも自分の有する知識を総動員して実践し、さらに他者と協同しながらプロジェクトを進めたり物事を解決したりする活動をしっかりと体験する、それが既存の「知」を吸収する原動力となり、他者と協同して「知」を探究したり、新たなことを実践したりする力となっていくのだと思います。学生が協同して多くの本や情報を使いながら、ともに話し合ったり作業をしたりする活動は、こうした学びにとっての大切な構成要素となるにちがひありません。

最後に、「学ぶ」ということについてです。真の学びの原動力は一種の渴望感だと思います。喉の渇きが水を求めるように、こうでありたいという思いが、それに必要な知を求めるのです。私の場合、そうした思いを抱いたのは大学を卒業してからでした。国語の教師としての経験をするなかで、はじめて日本語を学問することの必要性や魅力に気づいたのです。ようやく主体的な学びに目覚めた私でしたが、どうしても読んでみたい文法学の本が出てきても、専門的な本を読むことができるような環境にはなく、遠くの図書館にまで通ったこともありました。学生の皆さんには、本学での学生生活の中で、主体的な学びの経験をしてほしいと願っています。

大学図書館は、いつも学生の学びをサポートする場でした。これからも、大学での学びをスタートする段階から最終学年の段階まで、すべての段階で学生をサポートできる場として進化していくことと思います。

図書館学生アルバイトの「私のおすすめ本」

小関愛美（子ども教育学科1年）

『くちびるに歌を』 中田永一 著 小学館 2011.1

「未来の自分に手紙を書いてきて下さい。」このような宿題が、ある中学校の合唱部に出されます。なぜなら、Nコンと呼ばれる大会での今年の課題曲が「手紙」という、未来の自分に向けて書かれた歌だったからです。もし、あなただったら何を書きますか？

『くちびるに歌を』は、学生時代ならではの悩みや挫折、また、それを乗り越えていこうとする姿が多く書かれています。顧問の先生の産休や、男子部員の入部など、いろいろと環境が変化する中、果たして大会に間に合うのでしょうか。

この本を読めば、学生時代の部活動でのことがきっと思い出されます。この本に出てくる生徒たちの悩みが、自分の学生時代の悩みと重なっていることも多いはずです。一つの目標に向かって努力する仲間との絆を描いた、青春小説をぜひ読んでみてください。



後藤 愛（子ども教育学科1年）

『みをつくし料理帖』 高田 郁 著 角川春樹事務所 2009.5

皆さんはみをつくし料理帖というドラマを見たことがありますか？2012年と2014年にドラマ化し、北川景子さんが主演をつとめました。このドラマの原作となったのが、高田郁さんの書いた『みをつくし料理帖』です。

主人公の濡は1802年の水害で両親を亡くし天涯孤独となってしまいます。濡は大阪でもっとも有名な料理屋の天満一兆庵の女将に助けられ、奉公人として働くようになります。やがてその店の主人から料理を教わり始め、厳しい修業に耐えた濡は見事一人前の料理人になることができます。しかし、人生はそう甘くはないもので、濡には様々な災難がふりかかっていきます。どうやって濡は乗り越えていくのかがこの本の一冊のおすすめポイントだと思います。

主人公の濡は18歳なので親近感を持ちながら読み進めていくことができます。また、厳しい困難に立ち向かっていく姿は強く心を打たれます。この本は全10巻出版されています。是非手に取って読んでみてください。



齋藤優花（子ども教育学科1年）

『少女』 湊かなえ 著 双葉社 2012.2

一般的な小説は、視点を固定して話が進んでいくことが多いでしょう。しかし、湊かなえさんの『少女』は、主人公が章によって変わる形式のため、視点を変えて読むことができます。

この本は一見「女子高生2人の夏休みの事件を描いた本」のように見えます。しかし、のちの展開に備えて前もって準備されている伏線が多く張っており、読み終わった後、衝撃を受けます。章によって主人公が変わるため、内容を理解しづらいと思う方もいるかもしれません。しかしこの本にはアスタリスクがついています。そのアスタリスクの数に注目して読んでみてください。きっと読み終わった後、アスタリスクの意味がわかってくるはずです。彼女の本は読んだ後に嫌な気分になるミステリーとも言われますが、緻密な構成に気付くことができれば、気持ちが驚くほどすっきりします。ぜひ読んでみてください。



伊藤史恩（総合文化学科1年）

『夜は短し歩けよ乙女』 森見登美彦 著 角川書店 2006.11

私がお勧めする本は『夜は短し歩けよ乙女』という本です。この本は「私」と「乙女」という二人の登場人物の視点から二人が過ごす大学生活を可笑しくも、甘酸っぱく描いた作品です。この物語は4つの話からなっており、それぞれが春夏秋冬の話となっているため、二人の大学生の1年間を見ているような感じになります。さらにこの作品では「私」と「乙女」は「先輩」と「後輩」という関係で「私」は「乙女」に恋しています。しかし、「乙女」はそんなことも気にせず悠々自適にしています。そんな「乙女」と「私」は結ばれることができるのかと気になります。また、この作品は「私」と「乙女」以外の登場人物たちもなかなかの曲者ぞろいなので、話を見ていく中で、どんどんこの作品の世界にはまっていきます。ぜひ、そんな甘酸っぱさを描いたこの作品を手にとってみてください!!



志賀瑞保（総合文化学科1年）

『バッテリー』 あさのあつこ 著 教育画劇 1996.12

私がおすすめる本は、あさのあつこさんの『バッテリー』です。この本は実写映画化やドラマ化されていて、最近テレビでアニメにもなっているのを知っている人も多いかと思います。

天才ピッチャーの原田巧が新田市に引っ越して来るところから始まり、永倉豪とバッテリーを組んでからの1年間が描かれています。天才で自信過剰な巧、面倒見が良くてまっすぐで、しかし自分を追い込みすぎてしまう豪。そんな彼らを見てみると、中学生の頃の苛立ちや焦りといった、思春期特有の感性を思い出させてくれます。場面ごとに視点が変わり、登場人物達の感情が細かく表現されているので、感情移入がしやすく、場面を想像しやすいのがこの本の魅力です。

野球のルールは知らない私ですが、この本は野球のルールを知っている、知らないに関係なく読めるので、皆さんも是非、一度手にとってみてください。



上記の図書は図書館で所蔵しています。ぜひご利用ください。

平成27年度 図書館報告

(東北文教大学・東北文教大学短期大学部)

資料の構成

(平成28年3月31日現在)

1. 図 書	蔵書数	122,397冊
	年間受入冊数	1,346冊
2. 雑 誌	所蔵学術雑誌種数	(和 127種, 洋 168種 41種)
	年間受入雑誌種数	(和 142種, 洋 151種 9種)
3. そ の 他	新聞	(和 14種, 洋 17種 3種)
	視聴覚資料	所蔵数 1,076点
	データベース	Academic Search Elite, PsycINFO, 聞蔵, KD (カーデー) Magazine Plus, CiNii (サイニー)

利用状況

年間入館者数	29,687人
--------	---------

年間館外貸出冊数	5,646冊
----------	--------

学外者の年間入館者数	318人
------------	------

開館日数	262日
------	------

CiNii (サイニー) 検索数	13,326件
------------------	---------

貴重図書の紹介

『文選』

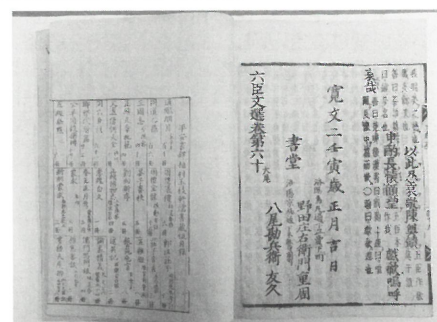
(寛文2年 野田庄右衛門・八尾勘兵衛刊)

附属図書館では、多くの和書・漢籍等を貴重資料として所蔵し、貴重図書室で管理しています。今回は、この中から、中国の古代に編纂された詩文集『文選』を紹介します。

『文選』は、日本の古墳時代に相当する中国梁代(530年頃)に成立した現存する最も古い詩文集であり、中国文学を研究する上で重要な資料とされています。編者は、梁の武帝の長子であった蕭統(昭明太子)とされ、約800の詩文が収録されています。日本においても、『万葉集』をはじめ多大な影響を及ぼしたといわれ、『枕草子』にも「書は文集、文選、……」と『白氏文集』と並んで記述されています。

原本は三十巻でしたが、唐の時代に李善が注釈を加えたときに六十巻となり、その後、宋の時代に作成された「五臣注」と合わせたものが「六臣注」とよばれるようになりました。

本学で所蔵する『文選』は、江戸時代初期の寛文2(1662)年に野田庄右衛門・八尾勘兵衛によって京都



で出版された「六臣注」のものです。全60巻・目録1巻がそろっています。

貴重資料は、本学の教員が研究等に必要の場合は閲覧・貸出に応じております。また、教員を通して申し込んでいただくと学生の皆さんも閲覧が可能です。